

はじめに

二〇〇〇年代初め、大学院に在籍していたころ、私たちは研究方法論の講義を担当して学部学生を指導することになった。その学科では必修の講義で、いちおう教授が教えることになっていたが、実際にはすべて私たちふたりに任されていた。ということではゼロから講義を組み立てなくてはならなかったし、どう指導したものか手がかりはほとんどなかった。ただ必要条件がひとつだけあって、それは学期の終わりまでに全学生が研究企画書を完成させなくてはならない、ということだった。つまり具体的な研究計画を立案し、その研究でどんな問題に取り組んで答えを出したいか、そのさいにどんな資料を用いるか、その研究によってどんな意味のある答えが出せて、どんな影響が期待できそうか、そういうことをおおまかに記述すればよいわけだ。

私たちはふたりに協力して、一学期間にわたる指導計画を練った。比較的短期間に、学生たちが本格的な研究プロジェクトを立案できるようにしたい。学部生としての経験、そして現在の駆け出し研究者としての自分自身の経験をふり返り、そのすべてをまとめてロードマップを——それこそ一二ステップの禁煙プログラムと同じぐらいわかりやすいやつを——作りあげた。完璧だ、そう思った。一次資料にあたること、メモを取ること、二次資料の注釈つき参考文献

を作成すること、仮説を立てること、論文の構成を考えること、そしてその研究にどんな意味があるかまとめること、そういうことがこれで全部できるようになるだろう。

この計画に従ってやっていけば、パズルのピースを組み立てるように論文を組み立てていける。

はずだった。

なのになぜだろう。講義が始まってすぐに私たちの計画はつまずいた。毎週ふたりして互いのメモを見くらべ、気がかりなパターンに気がつく。「やさしいロードマップ」を作ったはずが、学生たちは立ち往生し、ガレージから車を出すのもひと苦労で、せっかくそのために地図を作ったのに全国横断の旅に出るなど夢のまた夢だ。なにを研究したいかもわからないのに、どうやって参考文献を集めればいいのか。一般的な興味はあってもとくにこれといった疑問もない——そういうとき、どうやって適切な問いを立てればいいのか。どんな問いを立てていいかわからないのに、その問いの意味を考えろと言われても。ある文献を読んで面白いと思ったが、それをどう論文につなげていったらいいのかわからない。

あつという間に学期も半分過ぎたが、ほとんどの学生はこれといったプロジェクト案すらまだ見つけていなかった。みんな予定より大幅に遅れている。そもそも取り組むべき問いが立てられないのに、「文献を掘り下げて調査」したり「仮説を立て」たりすることがどうしてでき

よう。これをやりたいという気持ちをプロジェクト化することがどうしてできるだろう、そもそまなにかしたいのかわからないのに。

一部の学生はあきらめて、とくに面白いとも思わない問題を選び、私たちの指導に沿って忠実に作業を続けることにした。しかし、なにか選ばなければならぬからという理由でそのテーマを選んだのは明々白々だった。期限が近づくにつれ、学生たちも私たちも焦りを募らせていった。

あとから考えれば、なにがいけなかったのかは一目瞭然だ。最もむずかしいのは、**研究に着手する前の段階なのだ**。どんな問いを立てたいのか、どんな問題を解決したいのかまだわからない、その段階がいちばんむずかしいのに、そのことを私たちは忘れていた。研究というものは、中核的な問いが明らかになったあとに始まるのではない。なにを研究するかわかる以前にすでに始まっているのだ。これは研究というものの根本的な皮肉であり、それをどう乗り越えていくか、教えてくれる道案内はどこにもない。

本書は、私たちふたりが積み重ねてきた経験から生まれた本だ。何十年も教師をしてきて、そのあいだずっと考えつづけてきた——研究という道程に乗り出そうとする学生たちを導こうとして、かれらにはその能力もやる気もあつたのに、私たちはさんざん苦労したすえに失敗したわけだが、そのさいに気づいたことがあつた。世のなかには、なにを問えばいいか、なにが

問題なのかすでに知っている研究者に向けて、「研究方法」を説明する本はあふれているが、そもそもなにを問うか、なにが問題なのか、それを決めかねている学生の参考になる本は一冊もない。どのようにおおまかな構成を考え、原稿を書き、校正し、文献を引用するか、そういうことをみごとに説明してくれる本は何冊もある。そしてそういう本は、そのプロジェクトに適切な規模をどのようにして選ぶか、若き研究者に有益なヒントも与えてくれる。すでに行き先がわかっているならば、どの道を行けばいいか教えてくれるだろう。しかし、どこに向かえばいいのかわからないうちに、どうすればいいか教えてくれる本はない。どの本も、どこから歩きだせばいいか教えてはくれないのだ。

研究の進めかたを教える本はどっさりあるのに、自分がなにを研究したいのか見極める方法を教えてくれる本はほとんどない。これはなぜだろう。その理由はすぐにわかる。人はふつう自分の「やりたいこと」を最初から知っていて、あとはそれを追究するだけだとみんなが思い込んでいるからだ。だれでも最初からやりたいことがあって、それにはつきり気づいているとみんな思っているのである。

私たちはそうは思わない。だれしもそれぞれにやりたいことがあるとは思いますが、ただみんながみんなそれに気がついているとは限らない。やりたいことはあっても、正確に言語化できないかもしれない。それどころか、なにをやりたいのかまったく気がついていないこともある。

それは自分のことがあまりよくわかっていないからだったり、自分の興味があること、好きなことが「やりたいこと」の数に入るとは思っていないからだったりする。さらにややこしいことに、自分が本当はなにをしたいのか勘違いしていることもある。これは人が思うよりずっとよくあることなのだ。なんとと言っても、私たちはみな外的な期待（社会や文化や家族の期待など、現実にある期待も、あると思いついでいるだけの期待もある）に囲まれて生きているから、それを自分自身の期待だといつのまにか思い込む。自己を省みるすべや自分を信頼するすべを学ぶより、人はもつと手取り早い道を選びがちだ。他人のやりたいことを採用して、それが自分のやりたいことだというふりを一生懸命してしまうのである。

言い換えれば、どこから研究を始めるかという問いに直面したとき、人はついつい自分の外に答えを探してしまうということだ。外的なお墨つきを求め、他人に自分の課題を決めさせてしまう。しかし**研究というものは、研究者が自分のなかにある問題を見極め、それに対してどうすればいいか考えることから始まるもの**だ。生まれて初めて講義を担当したとき、私たちはそこに気づいていなかった。そうとは知らずに、能力を十分に発揮する機会を学生たちから奪ってしまったわけだ。自分で自分をじっくり観察する時間を与えれば、学生たちは研究者としてはるかに実りある経験ができただろう。

私たちは二〇年近く経って再会し、誤りを正す機会を得た。何年も前のあのときにこれを教

えたかった、その講義内容をまとめたのがこの本である。本書の根幹をなす指導原理を、私たちは〈自分中心的研究〉と呼んでいる。

「自分中心的研究」宣言

本書で推奨するのは、研究に対する「自分中心的」アプローチである。研究の初期段階に着目し、研究という旅に乗り出すさいに役立つさまざまなテクニックや心構えを説明する。これによって、正しい方向——つまり、きみ自身にとってひじょうに重要な問題——を見定めて、そちらに向かって出発することができるだろう。

さて、〈自分中心的研究〉とはなにか、なぜそれがよいのだろうか。

まず明確にしたいのは言葉の意味だ。なにを意味するのか、そしてなにを意味しないのか、である。

〈自分中心的研究〉を定義すれば次のようになる。

1 **実践**の面から言えば、まさに自分がいまいる場所から研究の道程に踏み出すこと、そして自己——自分の直感、興味、志向——との密接なつながりを終始維持することが重要

だ。「自分中心的な」研究者であるためには、どんなときも自分の二本の足でしっかりと立ち、自分のなかに重心を保たなくてはならない。実在も定かでない外的な審判者が喜びそうという理由で、テーマや問いを選んではいけない。

2 **精神的**には、研究者としての自己の能力と限界を自覚し、意識的に評価することである。自分を中心に置くというのは、自分が何者であるかを知り、自分自身の直感に耳を傾け、それが子供っぽいとかあいまいに思えるときでも信頼し、研究を進めつつそれを深化させていくということだ。

3 **考えかた**としては、課題を明確にし、研究の方向性を決めるうえで、自分のアイディア、前提、そして関心事を重視することである。研究者としての自分の関心と動機をよりよく（そしてより短期間で）理解できれば、きみにとって、そして広く世界全体にとっても研究する意義のある問題を、よりうまく（そしてより短期間で）発見できるだろう。その問題はしかし、だれよりもまず研究者本人、つまりきみにとって重要なものでなくてはならない。

〈自分中心的研究〉とはなにかについて述べたので、次は「**なにではないか**」を明らかにして
こう。

〈自分中心的研究〉とは、エゴのたがを外す（というかエゴを膨張させる）という意味ではない。自分を中心に置くとは、自分のことしか考えないとか、自惚れるとか自己満足とか、他人に頼らないとか、逆に自分に甘くて自分勝手とか、要するに利己的という意味ではないのだ。

まったく逆である。自分中心的研究者はたえずわが身をふり返り、自分で自分を批判しつづける。自分の興味や動機や能力について嘘をつかず、自問自答をくりかえしている。しかし、他者の意見の妥当性を評価できるだけの公平さと自信も持ちあわせている。つまり、広く認められた常識に挑戦する能力があるということだ。そしてその「常識」には、自分でも気づかないうちに信じ込んでいた根拠のない考えも含まれる。

また、〈自分中心的研究〉とは自伝的な研究という意味ではない。きみの書く論文や記事やレポートや本が、きみの人生を物語っているということではないのだ。ドキュメンタリーを制作しても絵を描いても、なんでも自画像になるわけではないのと同じだ。

〈自分中心的研究〉の最終目標は、従来どおりの研究と同じく、私たちを取り巻くこの世界の一面について、実証的で、根拠があり、理論的に裏づけられた、説得力のある研究成果を生み出すことであり、また他者の考えかたをもそれによって変化させることだ。しかし、他者にとって真に重要な問題を見極めて解決するためには、だれよりもまず自分にとってそれが重要な問題でなくてはならない、というのが〈自分中心的研究〉の考えかたである。

要するに、ちょっとした好奇心とか「いい思いつき」、あるいは第三者から割り当てられた仕事とか、そういうものを研究の焦点に据えてはいけないということだ。これはすぐれた研究成果を生み出すための第一の必須条件である。

以下では、問い——きみにとって重要な問い——をどのようにして生み出すか順を追って見ていこう。そしてきみの情熱と努力を通じて、それが他者にとって重要な問いともなり得ることを説明する。

中心のある研究こそ最高

研究はとても楽しい。ひとつには、少なくとも理屈の上ではなんでも研究できるからである。しかし、だからこそ人は途方に暮れてしまう。

いったいどこから始めたらいいのだろう。

その答えはこうだ——まさにいま、きみが立っている場所からだ。

本書の柱をなすのはふたつの命題である。ひとつ、最初にいくつかの条件を適切にクリアすれば、研究は人生を変えるような経験になりうる。ふたつ、研究に着手するさいに最も重要なのは、自分の中心を見つけることである。研究とはたんに問題を解決する作業ではなく、そん

な問題が存在することすらきみが——そして他の人々が——知らなかったような、そういう問題を見つける作業でもある。研究は発見と分析と創造の作業であり、それがやがて独自の勢いを獲得し、刺激し刺激されの好循環を生むことにつながる。深く埋もれた問題は、自分自身を信頼し、一次資料にあたり、時間をかけることによってのみ見えてくるものだ。自分はなにが研究したかったのか、それをきみに教えられるのはきみ自身だけ、ほかのだれでもない。「なにを研究するか」という問いに答えるには、鏡をじっくり見つめるしかないのである。

なるほど、「なにを研究すればいいのか」という問いに答えられるのは自分だけだと。だとしたら、この本を読んでなんになるのか？

もつともな疑問だ。

研究プロジェクトを生み出す秘密の方程式を知っているなどと言うつもりはない。なにを研究すればよいか教えることはできない。本書で教えられるのは、いくつかの問いを立てることできみのなかに潜在する研究課題を発見し、そこから実際に研究プロジェクトを立ち上げる、そこまでの道のりをスムーズにたどるのに役立つ具体的なテクニックだ。

ということでは本書の目的は、きみの心に火——ジャズドラマーのバディ・リッチが天才を評して言った言葉を借りるなら、「みずから点る火」——をつける理想的な条件を生み出す手助けをすることだ。それだけではなく、複雑で不確定であいまいな状況において、バランスと明

晰さをいかに保つかについても説明する。また、非生産的な不確実性（まちがった道に踏み込んでいて、引き返したほうがよさそうだという場合）と、生産的な不確実性（道に迷ったように感じるかもしれないが、内なる直感と叡智が先に進めと励ましている場合）とをどうやって見分けるかについても教えよう。

初めての研究テーマを探しているなら、本書を読めば助けになるだろう。いいアイデアがどっさりあつて、問いを生み出すのに困っていないなら、どのアイデアや問いに時間を注ぎ込むのがよいか理解するのに役立つだろう。すでにしっかり計画されたプロジェクトに着手しているなら、その研究を深化・純化させ、自分でも気づかなかった可能性を明らかにするのに役立つだろう。また経験を積んだ研究者や教師なら、研究の哲学やさまざまな戦略を知ることができ、それを学生に教えたり自分の研究法を改善するのにも利用できるかもしれない。

本書は、なによりもまず実践的であることを目指し、次のような場面で確実に役立つ具体的なテクニックを紹介する。

- 研究テーマを選択する。
- そのテーマから具体的で面白そうな問いを生み出す。
- その問いが生まれるもとなった潜在的な問題を明らかにする。

- そのテーマに関して自分のなかにある（かもしれない）思い込み、偏見、先入観を明らかにし、対応策を講じる。
- その問題に関わる利害関係を明確にし、競合する利益と関心に優先順位をつける。
- 同じ「テーマ」（つまり、きみの「専攻」や「分野」）を扱っている研究者と広く接触し、その仕事について知る。
- 自分の専門分野の外に目を向け、関連する研究者コミュニティを見つけてその関連性を調べる。
- 研究プロジェクトに役立ちそうな資料を探す。
- 見つかった資料をもとに問いに磨きをかけていく（とくに予備調査段階で）。
- プロジェクトの初期段階は迷いの出やすい危険な時期だから、その間に遭遇する精神的なつまずきの石に対処し、前進の勢いを維持する。
- 研究者として、頭の柔らかさとフットワークの軽さ、鋭い観察眼と熱意をもちつづける。

このような能力はどこでも不足している。ここでは学問の世界の言葉を使っており、論文などの学位だの、学生や講義や教師について語っているが、このような能力はさまざま分野や職業でも広く求められる重要なものだ。以下で紹介する考えかたや演習は、ビジネス、ジャーナ

リズム、アート、デザイン、エンジニアリング、コミュニティ構築、起業などにも応用できる。本書でとりあげる能力は調査研究の基本だから、どんな分野や専門レベルの人にも役に立つだろう。

この本の使いかた

本書を使うさいには以下の点に気をつけてほしい。これはきみがどんな研究者であっても変わらない。

- **書きながら読む。**これはまず第一にお勧めしたい。本書を読み進めるうえで最も重要なのは、自分の興味関心、前提や思い込み、問題、アイデアを記録することだ。これを本書では「自分証拠」と呼ぶ。本書で概要を述べる研究法は頭のなかだけで完結するものではないし、多くの演習では考えを文字で記録することが必要になる。道具はなんでもいい。ノートとペンでもいいし、電子的に記録するのでもいい。なんならチラシの裏やホワイトボード、石板だっつかまわない。この自分証拠は、あとで何度も見返すことになるだろう。書き足りないよりは書きすぎるぐらいのほうがいい（なぜそんな

に書かなくてはならないのか、それは最初の演習のところできわしく説明する。

● 必要に応じて演習と読み込み、書き出しをくりかえす。 本書の内容はすべて、くりかえし実践できるように書かれている。とくに次のような場合はぜひ。

● その練習問題を自分のプロジェクトに応用する場合（ただし、まだ自分のプロジェクトを立ち上げていなくても心配はいらない）。いくつか実例をあげてあるが、ここで紹介するアイデアは、自分の仕事に実際に応用して初めて目標達成に役立つのだ。

以下の三つのセクションがあちこちで出てくるが、これらのセクションでは、研究開始時のさまざまな段階でアイデアを実行に移す方法が説明されている。

- やってみよう
- よくある失敗
- 反響板

やってみよう

各章では、特定の目標——問いを立てる、問いに磨きをかける、問いと問いを結びつけるパ

ターンを見つける、研究の動機となる問題を特定するなど——を達成するのに役立つ、実践的な演習やゲームに取り組んでもらう。研究者によって効果的なアプローチは異なると思うので、多種多様な演習が用意してある。演習はすべて一連の大原則に基づいている。その原則とは

- 注意深く、かつ虚心に自己を観察する。
- あやふやで根拠のないちよつとした思いつきでも、声に出して言って構わない、むしろ積極的に言つたほうがいいと自分を励ます。
- 紙に書き出す。

本書は最初から最後まで通して読むことが望ましいが、あちこち拾い読みをしたいという人もいるだろう。研究は行つたり来たりやり直したりするもので、直線的に進められるものではない。同様に、本書も何度も読み返すことを前提に書かれている。初めて読むときに順序よくすべて取り組むかどうかはともかくとして、本書を役立てるためには演習をしっかりやりこなすこと、そして先にも述べたように手を動かして書き出すことが絶対に必要だ。

このようにひっきりなしに書けと言うのは、それが本書で言う「自分に関する証拠」すなわ

ち「自分証拠」を作成することになるからだ。この自分証拠を手がかりと見なして、きみは研究の初期段階で答えを出すべき重要な問い——なぜこのテーマに関心を持ったのか。このテーマのどこが、より大きな課題に対して重要な鍵を握っていると考えるのか。なぜこの一次資料が目にとまったのか。取りあげられそうなテーマはほかにもあるのに、なぜこのテーマについても戻ってきてしまうのか。なにが私の〈問題〉なのか——に答えていくことになる。

自分証拠は貴重な情報記録法のひとつだが、多くの研究者はこれを軽視していると思う。たぶん、いわゆる「自分探し」の日記帳のようなものと片付けているのだろう。主観的でエピソード証拠的な情報にすぎず、プロジェクトの「メイキング」ドキュメンタリーを制作するなら役に立つかもしれないが、そんなものは真の研究活動とは言えないと、そう考えられているわけだ。私たちはそうは思わない。そんな偏見を抱いている研究者は、もっと自分自身を見つめなおしたほうがいいのではないだろうか。

そういう自己省察を、習慣的に研究に取り入れることを私たちは推奨している。〈自分中心的研究〉のさいに作成する自分証拠は、経験を積んだ研究者が一次資料を読むときやインタビューのとき、民族誌学的な現地調査を行なうとき、あるいは書誌情報を書き写すときに作成するメモ書きのようなものだ。それを自分証拠と呼ぶのは、研究の初期段階にあつては、それが事実や引用、観察など周囲の世界に関するその他の証拠の記録よりも、はるかに大きな価値を

持つからだ。つまりきみ自身に関する証拠になるのである。これを手がかりとすることで、自分のなかにある隠れた疑問や問題を浮き彫りにすることができる。研究の初期段階でそれがわかれば、時間の節約になるし、迷いやもやもやを解消することもできる。しかしそれ以上に重要なのは、自分にふさわしい研究プロジェクトにたどり着ける公算が大きくなるということだ。

よくある失敗

「やってみよう」の演習の次には、かならずこのリストがあげてある。この失敗のほとんどは、以下の三つのカテゴリーに分類できる。

- 1 批判を恐れて予防線を張る。
- 2 自分の声に耳を傾けない。
- 3 メモを取らない。

これらの演習を使って、他の研究者や学生たちを指導してきて気がついたことがある。自分を守りたいという衝動（つまり防衛本能）を抑えたり、想像上の権威の声——一定の方向に沿

った調査研究を推奨し、それ以外を許すまいとする——に耳をふさいだりするのは、ときに非常にむずかしいということだ。

こういう悪習のせいで、内省に至る道が気づかないうちにふさがってしまったのだ。よくある失敗を知っていれば、このような衝動を抑え、虚心な自己観察に集中することができるだろう。そのさいはかならずメモをとろう。そうやって書き留めておいた記録は自己観察の基礎となり、プロジェクトを形にするのに役立つからだ。なにかも憶えておこうとするのはやめよう。ひらめきはすぐに記憶から抜け落ちてしまうものだ。これから何度も警告することになるが、あとでまとめて書こうと思っではいけない。いま考えたことをいま書き留めるのだ。

反響板

〈反響板〉に自分のアイデアを投げかけるのはときに役に立つ。ここで言う〈反響板〉とは、教師や師匠メンター、友人、研究仲間など、相談相手になってくれる人のことだ。相談するときになに気をつけたらいいか、本書では具体的な方法を提案する。〈反響板〉に向かつて話すのは、自分のアイデアや文章をべつの角度から見直すことにつながり、自分自身を客観的に見直すのにも役立つ。自分のアイデアについて話すうちに、最初は気づかなかった側面が見えてきたり、知らず知らずにやっている自分の考えかたの癖が見つかったりするかもしれない。〈反

響板〕は自分自身を見つめなおし、よりよい決断を下すのに役立つから、研究の初期段階で信頼できる人と話すことをぜひ習慣化しよう。〈自分中心的研究〉をマスターすれば、いずれは自分で自分の〈反響板〉を務める能力も身についてくる。

〈反響板〉を用いるさいには、ひとつ重要な点に注意してほしい。教師や相談役などの権威ある人物からの善意の提案——つまり、どんなことを「研究できる」か、あるいは「研究すべき」かという——は、研究の初期段階において非常に大きな影響力を持つことがある。迷っていたり、萌芽的なアイデアの価値にまだ自信が持てなかったりしていると、上司や教師からの提案（高飛車な提案ならとくにそうだ）は命令のように感じられがちだ。あるいはそれが安全ネットになってしまい、「これよりよいのは思いつきそうにないし、もうこれでいいじゃないか」ということになってしまったりする。親切に指導してもらうのは、手っ取り早く話を先に進める便利な方法に思えるかもしれない。面倒な自問自答などすつ飛ばすこともできる。信頼できる相談相手が重要だと言ってくれた、できあいのアイデアに飛びついてしまっても、なにも問題はなさそうに思える。しかし残念ながら、それが足かせとなって逆効果をもたらすことがあるのだ。

私たち自身、指導者として何度も経験がある。最初に私たちが何気なく口にしたアイデアに、学生たちは足をとられてしまう。そんなときには、数か月後に出てきた論文を見て、ほん

とうにこれを書きたかったのかと納得できない思いをすることになる。それで最善の結果が得られることはまずない。研究で重要なのは安全策をとることではなく、危険を恐れず前進して、新しいものを発見し創造することだ。指導者にアドバイスを求めれば、他の人と同じ道をたどって同じ結論に至るといった、むだなことをせずにすむ場合もあるだろう。しかし、きみが研究プロジェクト案を持って行って「これでいいと思いますか」と尋ねたら、真の指導者の答えはただひとつ——「きみは、それでいいと思うの」である。

経験から言うと、時間をつぎ込んでも答えを見つけたいと心底思う課題でないと、よい成果をあげるのはもちろん、最後までやりとげるのすらむずかしいものだ。だから〈反響板〉と話をする前でも、また研究資料に真剣に取り組む前であっても、本書の第1部に書かれたステップに従って、自分の中心を見極めることがたいせつだ。

内側が第一、外側は第二

研究プロジェクトの着手段階では、まず自分自身の内面を見つめ、次に外側に目を向けるというふたつの作業が必要になる。本書第1部では、自分中心の研究者となるための内観重視の方法を紹介する。これまで身につけてきた経験や興味関心、優先順位、思い込みについて見直

し、それを最大限に活用して研究の方向性を決定するにはどうしたらいいか考えよう。この方法は通常のブレインストーミングよりすぐれている。なぜなら自分の価値観を総ざらいすることが必要になるからだ。きみにとって重要でないこと、きみにとって重要だと思つてゐること、ほんとうにきみにとって重要なことを区別しなくてはならない。

研究者コミュニティに相談して自分のアイディアを検証するより先に、この内観作業に手をつけるのが一番だと思う。アイディアは山ほどある——そのすべてが等しく有益というわけではない——し、研究の最初期であっても、そのどれを自分のプロジェクトに取り入れるべきかじっくり評価するほうがよい。また権威もどつきりある（そしてこれまた、そのすべてが等しく有益というわけではない）から、自分がなにをしたいのかまだあやふやなこの危険な段階では、それに過度に左右されてしまう恐れがある。

自分中心の研究者になるためのステップを踏んでいくと、研究者コミュニティの問い、方法論、理論、プロトコル、前提、そして集合的な経験に照らして、自分のプロジェクト案を評価したり、改善したりする準備が整ってくる。第2部では、この外観という作業に焦点を当てて説明する。その目的は、従来「研究分野」とか「専門」と呼ばれる研究者コミュニティとうまくつきあえるようになってもらうことだ。最初のうちは、勝手がわからずまごまごしがちなものだから。また、類似の問題に関心はあるが同じ研究分野に属していない研究者——本書では

〈問題集団〉と呼ぶ——を見つける方法についても説明する。研究分野や専門は、学科とか団体、専門雑誌、学位によってわりあい簡単に特定できるものだ。〈問題集団〉はそれほど自明とは言えないが、本書の重要な考えかたなので第2部の最初で取りあげることにする。

やってみよう——ここで、いまずぐ書く

目標

研究のアイデア出しの段階で、メモをとることを習慣にする。まだプロジェクトがきちんと形をとる前であっても、研究に関して考えたことや推測したこと、目的などを書き留めるところから始めよう。

さあ、書きはじめよう。そのとおり——いまここで、このページに書くのだ。

先に述べたとおり、この本は学習帳だ。大事な試合の前の激励演説ではない。行動

前の前奏でもない。黙って受講する講義でもない。私たちが書いたのは本書のほんの一部で、**いちばん重要な部分はきみ自身が進めながら書いていくのだ**。この本は手引きとして、マニュアルとして、塗り絵帳として使ってほしい。わからないことや思いつきや疑問点を余白にびっしり書き込もう。傍線を引き、マーカーを使い、ペーシのかどを折って目印をつけよう。

本書の各セクションには、この「はじめに」もそうだが、書く作業や演習がかならずあって、研究の目標や優先順位や計画について考えているうちから、さっそく書き始められるようになっていく。本書を通じて何度も力説することになるが、研究は直線的に進められるものではないから、いまやっている書く作業も「下書き」ではなく、あとで捨ててかまわないむだな落書きを生み出しているわけではない。肩慣らしではないのだ。いま書いているメモも**研究の核となる作業**、すなわちアイデアを生み出し、記録し、検討し、新たな情報に基づいて修正し、疑問を解消してより正確に表現する方法を、たえず探しつつける作業の一部なのだ。

本書を使って（あるいは本書に）した書き込みは、すべて研究を進める助けになる。なぜなら

- アイディアの進化記録——「自分証拠」——になる。
- 自分の考えたことをたえず外面化することで、記憶の助けとなり、また共同研究者の参考にもなる。
- 研究初期段階のさまざまな場面で、その場面ごとに異なる種類の文章を書いていくことにより、一步一步段階的に、プロジェクトを構築していける。
- 書く作業を研究者としての当たり前の習慣にできる。

というわけで、研究プロジェクトで達成したいといま思っていることを、下の余白に書いてみよう。どんなテーマや問いに興味があるのか。なにが達成できたら、きみにとっての「成功」になるのか。どんな結果が出れば理想的なのか。これは憶えておこう——制約などない。だれのためでもない、これはきみ自身のために書くのだから。

よくある失敗

- 他人のために書いてしまうこと。このブレインストーミングでは、人を感じさせる必要はないし、重要そうに聞こえる必要も、目標を合理化する必要もない。自分が研究したいと思うことをそのまま書けばいいのだ。